

Title	高齢者のボランティア活動に関する研究の動向 : シニアボランティアの現状と課題
Author(s)	中原, 純
Citation	生老病死の行動科学. 10 P.147-P.155
Issue Date	2005
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4212">https://doi.org/10.18910/4212</a>
DOI	10.18910/4212
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 高齢者のボランティア活動に関する研究の動向

## ～シニアボランティアの現状と課題～

### A review of research findings for the current state and issues of senior volunteers.

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 中原 純

#### Abstract

This review aims to focus on the present situation and future prospects of senior volunteer as the 'site' for young olds to participate in 'active' and 'productive' work. Recently, seniors' participation in volunteer work has been popular, especially as the way of obtain sociability. Participation in senior volunteers, as a result, may have positive effects on individual mental health and provide social role to the individuals. Thus, senior volunteer could be regarded as 'active' and 'productive' work, which could be the strategy to resolve several problems of young olds. In future, when people in baby-boom generation become young olds, the provision of various types of volunteer work will be more important to meet their needs and of young adults.

Key word : senior volunteer, active aging, productive aging, factors of volunteer, effects of volunteer

#### I はじめに

近年、老年学の分野では「active aging」や「productive aging」という言葉が頻繁に語られるようになった。「active aging」とは、活力ある高齢化や生き生きとした長寿を目指すという考え方で、1990年代の後半から欧米の老年学者の間でいわれるようになった考え方である(前田, 2003)。また、「productive aging」とは、『老い』というものをポジティブにとらえ、『relativity (依存性)』ではなく『productivity (生産性)』という発想を持つこと、そして、その発想によって、高齢者の持つ能力をもっと社会に活用していくためのスローガンとして生まれた概念である(バトラー・グリーンソン, 1998; Caro, Bass, & Chen, 1993)。

現在の日本において、仮に高齢期を65歳以上とするならば、65～74歳は比較的健康な前期高齢者、75歳以上をより健康上の老化が進んだ後期高齢者と呼ぶことができる。このように、65歳以上の人々は高齢者と一くりにできないほど、身体的な健康および機能上、多様な人々の集団となっている。後期高齢者に多く見られるような、健康上の障害を負った人に対しては、2000年に制定された介護保険等の公的な援助が必要である。一方で、比較的元気な前期高齢者であるとはいえ、退職後の社会的役割の喪失(竹内, 2004)、生きがい感の喪失(近藤・鎌田, 2003)、社会的ネットワークの変化(西村, 1993)等、様々な問題を抱えると言われている。

これらの問題を解決するためには、高齢者自身にとって「active」であり、社会にとって「productive」な活動を行うことが必要である。この「active」かつ「productive」な活動の代表的な「場」として、ボランティア活動が考えられることは多い(Herzog, & Morgan, 1993)。そこで、本論では、ボランティア活動の現状、ボランティア活動の促進要因、ボランティア活動の心理的効果についてレビューし、今後の日本におけるシニアボランティアの可能性について考察する。

## II ボランティア活動の現状

### 1. ボランティア活動の定義

ボランティア活動についての決まった定義は存在しないが、「ボランティア」は広辞苑(1998)によると、「志願者、奉仕者、自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」とされている。つまり、ボランティア活動は「ボランティア」が行う活動と定義されると考えて差し障りないはずである。このように定義を考えると「有償ボランティア」という言葉があるように、ボランティア活動の定義の枠を超えた概念を説明できなくなるなどの問題点を残すことにもなるが、本論文においてはこの点を議論することが目的ではないため、詳細な論述は避けることとし、先に述べた簡略な定義を採用することとする。

また、ボランティア活動同様、シニアボランティアの定義についても存在しない。本論文においては、シニアボランティアを60歳以上でボランティア活動を行っている人と簡略に定義し、論を進めることとする。

### 2. ボランティア活動の現状

現在、1年間に何らかのボランティア活動を行った人は約3263万人であり、全国民の28.9%にも上ることが明らかとなっている。その中で、高齢者に焦点を当てると、60~64歳の人で30.5%、65~69歳の人で31.4%、70歳以上の人でも25.5%となっている(総務省統計局, 2001)。これらの数値から、日本において高齢者のボランティア活動は一般的な活動になっていることがわかる(前田, 2003)。

一方、より積極的にボランティア活動に参加している人のデータとして、都道府県・指定都市社協及び市区町村社協ボランティアセンターで登録または把握しているボランティア活動者数は約740万人、活動団体は101,972グループと言われている(厚生労働省, 2004)。また、そのような団体の会員の30.8%は60歳以上の高齢者であるという報告がある(厚生省, 1996)。調査の年代が異なるため、単純な数値の計算でシニアボランティアの数を把握することはできないが、積極的にボランティア活動に関わる人の多くは高齢者であることがわかる。

## III ボランティア活動の促進要因

### 1. 属性要因

日本において、ボランティア活動を行う人の属性要因を取り上げた実証的研究は存在しない。しかし、実態把握の資料は存在するため以下に紹介する。厚生労働省(2004)によると、ボランティア活動団体所属メンバーの72.7%が女性である。また、ボランティア団体所属メンバーの職業では、主婦・主夫が38.1%で最も多く、次いで定年退職後の方が24.5%となっている。以上の結果から、性別が女性であることと、定職を持たないことがボランティア活動を促進する要因となる可能性が示唆されている。

一方、海外においては、年齢が60代であること(U.S. Census Bureau, 2002)、高学歴であること、生まれた土地で生活していること(Cambre, 1993)、高収入を持つこと(Wilson & Musick, 1997)などがボランティア活動を促進する要因としてあげられている。これらの要因は、日本の研究において、自明のこととしてなおざりにされている可能性があるが、ボランティア活動の促進要因であると結論付けるには研究が少ないため、今後詳細な検討が必要とされる。

## 2. 心理的要因（動機付けの研究から）

ボランティア活動を促進する心理的要因は主に大学生を対象に動機付けの研究として行われてきており、伝統的には自発性を基礎とし、公益性、奉仕性、献身といった動機が重なることによって行われるものとされてきた (e.g., Batson, 1991; 迫・上地・山本, 1997; Schroeder, Penner, Dovidio, & Piliavin, 1995; 田尾, 2001)。しかし、迫他 (1997) の大学生を対象とした研究においては、身近な興味ある活動を通して経験や視野を広めたいという動機からボランティア活動を行うという結果が出ており、伝統的な要因のみでは説明できないことが示されている。そこで、以下に伝統的な心理的要因以外で、先行研究で取り上げられてきたものを、特に高齢者が対象ではない場合と高齢者を対象とした場合に区別して概観する。

特に高齢者を対象としていない研究においては、他者の幸福を望む利他的動機、自己の成長や幸福を望む利己的動機、社会からの恩恵に報いるためにボランティア活動を行う社会的義務の側面からボランティア活動を説明しようと試みた研究が多い (e.g., Cnaan & Goldberg-Glen, 1991; Fitch, 1987; Winniford, 1991)。その中でも、Cnaan & Goldberg-Glen (1991) はボランティア動機尺度 (MTV: Motivation to Volunteer) を開発している。そして、日本においては、これらの動機の中で、利己的動機が最も重要であることが示唆されている (谷口, 2001)。安藤・広瀬 (1999) はこの利己的動機に焦点を当て、ボランティア組織への帰属意識の高さ (Abram, Ando, & Hinkle, 1998; O'Reilly & Caro, 1994; Rouse, & Clawson, 1992)、他人からの期待の程度についての認知である主観的規範 (Fishbein & Ajzen, 1975)、活動に対するコスト評価がボランティア活動意図と関連することを示している。

一方、高齢者を対象にした研究では、Clary, Snyder, Ridge, Copeland, Stukas, Haugen, & Miene (1998) のボランティア活動動機尺度 (VFI: Volunteer Function Inventory) に関する一連の研究がある。VFIは、Katz (1960) や Smith, Bruner, & White (1956) の伝統的な態度理論を背景にし、ボランティア活動に関する研究 (e.g., Clary & Miller, 1986; Clary & Orenstein, 1991; Frisch & Gerard, 1981; Gidron, 1978; Jenner, 1982; Rosenham, 1970) をふまえた上で作成された、価値観 (Value)、社交性 (Social)、防御 (Protective)、理解・学習 (Understanding)、キャリア (Career)、自尊心 (Enhancement) の6因子、30項目からなる、主に利己的動機を扱った尺度である。そして、Clary et al. (1998) や Okun, Barr, & Herzog (1998) において妥当性や信頼性が示されている。VFIが作成される以前は、ボランティアの活動動機について、様々な内容の2~6のカテゴリーに分類されてきた (Clary, Snyder, & Stukas, 1996; Gidron, 1984; Morrow-Howell & Mui, 1989) が、現在では、VFIを中心としてボランティア活動研究は行われている (e.g., Bowen, Andersen, & Urban, 2000; Ferrari, Loftus, & Pesek, 1999; Okun & Schultz, 2003)。そして、Okun & Schultz (2003) は、高齢者は理解・学習やキャリアを求めてボランティア活動に参加するというよりは、より社交性を満たすためにボランティア活動に参加する傾向にあることを示している。また、日本においても、VFIは李・斉藤・高橋・甲斐 (2004) によって翻訳が試みられており、今後、VFIを利用してボランティア活動動機研究が展開されていくことが予想される。

しかし、これらの心理的要因に関する研究は、ボランティア活動の開始動機 (『なぜボランティア活動をするのか?』) と活動継続動機 (『なぜボランティア活動を継続するのか?』) の2点が混在するものである。谷口 (2001) や安藤・広瀬 (1999) はこれらの区別を行いつつ

研究を試みているが、両研究とも開始動機と継続動機の区別を直接の目的としないため、十分な議論はなされていない。これからシニアボランティアになろうとする高齢者にとって重要なのは前者であり、既に活動をしている高齢者にとっては後者であることは明白であり、今後シニアボランティアを促進することを考えるならば、以上の2点を区別した活動動機の議論が必要とされる。

#### IV ボランティア活動の心理的効果

ボランティア活動の効果を考える際に、活動の結果生み出されたものが「如何に社会に役に立つものであるのか」という効果と、活動の結果「如何に活動者自身の変化を生むのか」という効果の2つの視点でボランティア活動の効果を考えなければならない。前者の効果についての研究も数多くなされており (e.g., Everett & Peirce, 1991; Hopper & Nielsen, 1991; 杉浦・大沼・野波・広瀬, 1998)、「productive aging」を考える上では重要なことであるが、本論においては後者の効果を中心に以下にレビューする。

高齢者がボランティア活動をすることの個人内への効果についての初期の研究には、ボランティア活動と身体的・精神的健康との関係性のみを示し、関係の方向性については課題の残る研究 (e.g., Ager, 1986; Hunter & Linn, 1980) が多いのに対して、縦断的なデータを用いて因果関係を明らかにしようとする研究が近年増加している。まず、身体的な効果については、ADL (Activity of Daily Living) (Lum & Lightfoot, 2005; Luoh & Herzog, 2002; Menec, 2003)、IADL (Instrumental Activity of Daily Living) (Lum & Lightfoot, 2005; Menec, 2003)、身体的な機能低下・障害の予防 (Glass, Seeman, Herzog, Kahn, & Berkman, 1995; Moen, Dempster-McClain, & Williams, 1992)、死亡率の改善 (Glass et al., 1995; Musick, Herzog, & House, 1999; Oman, Thoresen, & McMahon, 1999) などとのポジティブな関連が示されている。しかし、Lum & Lightfoot (2005) は、先行研究が身体的健康を主観的に尋ねたものに過ぎないという点を指摘し、医学的な診断での身体的健康や老人ホームなどへの入所状況との関連を分析し、ボランティア活動がこれらを説明しないという結果を報告している。この研究をもってボランティア活動が身体的健康に影響しないと結論付けるのは時期尚早ではあるが、従来の知見と異なる結果が報告されたことで、ボランティア活動と身体的健康の関係は更なる検討が必要となったと考えられる。

次に、精神的な健康との関連では、生活満足度 (e.g., Van Willigen, 2000; Thoits, & Hewitt, 2001)、主観的幸福感 (e.g., Menec, 2003; Thoits & Hewitt, 2001)、抑うつ (e.g., Morrow-Howell, Hinterlong, Rozario, & Tang, 2003; Wilson & Musick, 1997)、自尊心 (Thoits & Hewitt, 2001) などとの関連が示され、ボランティア活動は概ねポジティブな影響を及ぼすことが明らかとなっている。

また、Van Willigen (2000) において、若者はボランティア活動時間が80時間程度を境にそれ以上のボランティアは生活満足度を低下させるが、高齢者は単調増加を維持する。一方で、高齢者は80時間程度を境に身体的健康を低下させるという結果が報告されている。Morrow-Howell et al. (2003) は週2～3時間の活動が最も身体的・精神的健康によく、それ以上は効果がないと報告している。活動適正時間については、研究の歴史が浅いため十分な議論がなされておらず、今後の課題といえる。

その他、ボランティア活動自体が死亡率に影響するのではなく、そこで築かれるソーシャル・

ネットワークによる情報のサポートが死亡率の低下を実現するといった指摘 (Lum & Lightfoot, 2005) がある。同時に、従属変数が死亡率ではないが、ソーシャル・ネットワークが身体的健康にポジティブに作用するという報告は多い (e.g., Ostir, Simonsic, Kasper, & Guralnik, 2002 ; Seeman & Chen, 2002) ため、Lum & Lightfoot (2005) の指摘の妥当性が示唆されている。さらに、役割理論 (George, 1993) を背景として、ボランティア活動によって役割アイデンティティを持つことが身体的・精神的健康に良い影響を与えることを示した報告 (Greenfield & Marks, 2004) は、高齢者にとって社会的役割が重要であることを実証的に示し、ボランティア活動がその役割を担えることを示した点で意義のある研究と考えられる。

以上の先行研究から、ボランティア活動を行い、active に生活することによって、高齢者は自身の身体的・精神的健康をポジティブに変化させることができることが示されている。同時に、高齢者がボランティア活動を通して健康的に生活することによって、高齢者の介護にかかる労働力や資金が削減できると考えられる。つまり、高齢者自身のポジティブな変化は、間接的には、社会に貢献するものであり、productive なものであるとも考えられる。

## V 日本におけるシニアボランティアの可能性

### 1. 学問上のまとめと課題

先行研究をまとめると、高齢者がボランティア活動を行うことは一般的であり、彼らは社交性を満たすためなどの利己的動機によってボランティア活動を行う。また、その結果、ボランティア活動は個人の身体的・精神的健康にもポジティブな影響を与え、そのポジティブな影響が社会的貢献に寄与する可能性を考察した。つまり、ボランティア活動は「active aging」を可能にする活動、かつ、「productive aging」を可能にする活動と考えられ、ボランティア活動を行うことは前期高齢期の様々な問題 (近藤・鎌田, 2003 ; 西村, 1993 ; 竹内, 2004) を解決する方略となることが示唆される。

逆に、明らかになっていない点は、ボランティア活動の属性要因に関する点、活動の開始動機と継続動機の区別、ボランティア活動の適正頻度および時間などである。今後、以上のような先行研究からの知見と課題をふまえた上で、課題を明らかにしていくような研究が必要であると考えられる。

また、本論でレビューした研究の多くはボランティア組織に自ら積極的に参加している人の結果であるため、ボランティア活動のニーズが高い対象者についてのみの結果である。ボランティア活動を行いたいと思わない人に対するボランティア活動のポジティブな効果が立証されているわけではない。この点に関して、明確な結論を持たないままシニアボランティアを促進することには、多少の危険が含まれると考えられるため、早急な研究と議論が必要とされる。

### 2. 日本におけるシニアボランティアの可能性

2-2 において日本の高齢者がシニアボランティアとなることは一般的になっていることは既に述べた。そして、今後団塊世代の高齢化に伴い、前期高齢者人口が飛躍的に拡大することが予想されることは、シニアボランティア人口の増加を示唆するものである。今後、シニアボランティアの多様なニーズに対して、ボランティア団体が各人のニーズにあった活動を斡旋できるかどうかは課題となる (佐瀬, 2003)。団塊世代のボランティア活動への具体的なニーズを

調査し、それにあつた活動を提供することができれば、日本においてシニアボランティアは活発になるであろう。

## 引用文献

- Abrams, D., Ando, K., & Hinkle, S. 1998 Psychological attachment to the group: Cross-cultural differences in organizational identifications and subjective norms as predictors of workers' turnover intentions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 1027-1039.
- Ager, C. L. 1986 Therapeutic aspect of volunteer and advocacy activities. *Physical and Occupational Therapy in Geriatrics*, 5(2), 3-10.
- 安藤香織・広瀬幸雄 1999 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因 社会心理学研究, 15, 90-99.
- バトラー R・グリーンソン H.(編) 岡本祐三(訳) 1998 プロダクティブ・エイジング—高齢者は未来を切り開く— 日本評論社  
(Butler, R. N., & Gleason, H. P. (eds.) 1985 *Productive aging; Enhancing vitality in later life*. New York: Springer.)
- Batson, C. D. 1991 *The altruism question: Toward a social-psychological answer*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bowen, D. J., Andersen, M. R., & Urban, N. 2000 Volunteerism in a community-based sample of women aged 50 to 80 years. *Journal of Applied Social Psychology*, 30, 1829-1842.
- Camble, S. M. 1993 Volunteerrism by elders: Past trends and future prospects. *The Gerontologist*, 33, 221-228.
- Caro, F. G., Bass, S. A., & Chen, Y. 1993 Intoroduction: Achieving a Productive Aging Society. In Caro, F. G., Bass, S. A., & Chen, Y. (ed.), *Achieving a Productive Aging Society*. Auburn House Westport, Connecticut · London. Pp. 3-26.
- Clary, E. G., & Miller, J. 1986 Socialization and situational influences on sustained altruism. *Child Development*, 17, 58-64.
- Clary, E. G., & Orenstein, L. 1991 The amount and effectiveness of help: The relationship of motives and abilities to helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 58-64.
- Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J., & Miene, P. 1998 Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1516-1530.
- Clary, E. G., Snyder, M., & Stukas, A. 1996 Volunteers' motivations: Findings from a national survey. *Nonprofit and Volunteery Sector Quaterly*, 25, 485-505.
- Cnaan, R. A., & Goldberg-Glen, R. S. 1991 Measuring motivation to volunteer in human services. *Journal of Applied Behavioral Science*, 27, 269-284.
- Everett, J. W., & Peirce, J. J. 1991 Social networks, socioeconomic status, and environmental collective action: Residential curbside block leader recycling. *Journal of*

- Environmental systems*, 21, 65-84.
- Ferrari, J. R., Loftus, M. M., & Pesek, J. 1999 Young and older caregivers at homeless animal and human shelters: selfish and selfless motives in helping others. *Journal of Social Distress and the Homeless*, 8, 37-49.
- Fishbein, M., & Ajzen, I. 1975 *Berief, intention, and behavior. An introduction to theory and reseach*. Reading: Addison Wesley.
- Fitch, R. T. 1987 Characteristics and motivations of college students volunteering for community service. *Journal of College Student Personnel*, 28, 567-579.
- Frisch, M. B., & Gerard, M. 1981 Natural helping systems: A survey of Red Cross volunteers. *American Journal of Community Psychology*, 9, 567-579.
- George, L. K. 1993 Sociological perspectives on life transitions. *Annual Review of Sociology*, 19, 353-373.
- Gidron, B. 1978 Volunteer work and its rewards. *Volunteer Administration*, 11, 18-32.
- Gidron, B. 1984 Predictors of retention and turnover among service volunteer workers. *Journal of Social Service Research*, 8, 1-16.
- Grass, T. A., Seeman, T. E., Herzog, A. R., Kahn, R., & Berkman, L. F. 1995 Change in productive activity in late adulthood: MacArthur studies of successful aging. *Journal of Gerontology*, 50, 65-76.
- Greenfield, E. A., & Marks, N. F. 2004 Formal volunteering as a prospective factor for older adults' psychological well-being. *Journal of Gerontology*, 59, 258-264.
- Herzog, A. R., & Morgan, J. N. 1993 Introduction: Achieving a Productive Aging Society. In Caro, F. G., Bass, S. A., & Chen, Y. (eds.), *Achieving a Productive Aging Society*. Auburn House Westport, Connecticut · London. Pp. 119-142.
- Hopper, J. R., & Neilsen, J. M. 1991 Recycling as altruistic behavior: Normative and behavioral strategies to expand participation in community recycling program. *Environment and Behavior*, 23, 195-220.
- Hunter, K. L., & Linn, M. W. 1980 Psychosocial differences between elderly volunteers and non-volunteers. *International journal of Aging and Human Development*, 12, 205-213.
- Jenner, J. R. 1982 Participation, Leadership, and the role identity in volunteerism among selected women volunteers. *Journal of Voluntary Action Research*, 11, 27-38.
- Katz, D. 1960 The functional approach to the study of attitudes. *Public Opinion Quarterly*, 24, 163-204.
- 近藤勉・鎌田次郎 2003 高齢者向け生きがい感スケール(K-I式)の作成および生きがい感の定義 社会福祉学, 43(2), 93-101.
- 広辞苑—第5版 1998 新村出編 岩波書店
- 厚生労働省 2004 厚生労働白書
- 厚生省 1996 厚生白書
- Lum, T. Y., & Lightfoot, E. 2005 The effects of volunteering on the physical and mental health of older people. *Research on Aging*, 27, 31-55.
- Luoh, M., & Herzog, A. R. 2002 Individual consequences of volunteer and paid work in



- old age: Health and mortality. *Journal of Health and Social Behavior*, 43, 490-509.
- 前田大作 2003 active ageing をめざして—社会参加・相互扶助の可能性と進め方を考える—  
老年精神医学雑誌, 14, 847-852.
- Menec, V. H. 2003 The relation between everyday activities and successful aging: 6-year longitudinal study. *Journal of Gerontology*, 58, 74-82.
- Moen, P., Dempster-McClain, D., & Williams, R. 1992 Successful aging: A life-course perspective on women's multiple roles and health. *American Journal of Sociology*, 97, 1612-1638.
- Morrow-Howell, N., Hinterlong, J., Rozario, P. A., & Tang, F. 2003 Effect of volunteering on the well-being of older adults. *Journal of Gerontology*, 58, 137-145.
- Morrow-Howell, N., & Mui, A. 1989 Elderly volunteers: Reasons for initiating and terminating service. *Journal of Gerontological Social Work*, 13, 21-34.
- Musick, M. A., Herzog, A. R., & House, J. S. 1999 Volunteering and mortality among older adults: Finding from a national sample. *Journal of Gerontology*, 54, 137-180.
- 西村純一 1993 定年退職期の社会的ネットワーク変化の認知に関連する要因の検討 社会心理学研究, 8, 76-84.
- Okun, M. A., Barr, A., & Herzog, A. R. 1998 Motivation to volunteer by older adults: A test of competing measurement models. *Psychology and Aging*, 13, 608-621.
- Okun, M. A. & Schultz, A. 2003 Age and motives for volunteering: testing hypotheses derived from socioemotional selectivity theory. *Psychology and Aging*, 18, 231-239.
- Oman, D., Thoresen, C., & McMahon, K. 1999 Volunteerism and mortality among the community-dwelling elderly. *Journal of Health Psychology*, 4, 301-316.
- O'Reilly, P., & Caro, F. 1994 Productive aging: An overview of the literature. *Journal of Aging and Social Policy*, 6(3), 39-71.
- Ostir, G. V., Simonsick, E., Kasper, J. D., & Guralnik, J. M. 2002 Satisfaction with support given and its association with subsequent health status. *Journal of Aging and Health*, 14, 355-369.
- 李 相侖・齊藤民・高橋都・甲斐一郎 2004 ボランティア活動動機尺度 (Volunteer Functions Inventory) の日本語版尺度の検討 第46回日本老年社会科学大会報告要旨号, 229.
- Rosenham, D. L. 1970 The natural socialization of altruistic autonomy. In Macauley, J. & Berkowitz, L. (eds), *Altruism and helping behavior*. New York: Academic.
- Rouse, S. B., & Clawson, B. 1992 Motives and incentive of older adult volunteers: Tapping an aging population for youth development workers. *Journal of Extension*, 30, 9-12.
- 迫明仁・上地雄一郎・山本力 1997 ボランティア活動に関する学生の意識と動向—ある大学での調査と認識構造の解析 岡山県立大学短期大学部研究紀要, 4, 13-26.
- 佐瀬美恵子 2003 団塊世代が地域でボランティアとして活躍するために—ボランティアセンター及びコーディネーターの役割を中心に マスターズ市民白書編集委員会 (編) マスターズ市民白書 大阪ボランティア協会 Pp. 41-49.
- Schroeder, D. A., Penner, L. A., Dovidio, J. F., & Piliavin, J. A. 1995 *The psychology of*

- helping and altruism: Problems and puzzles*. New York: McGraw-Hill.
- Seeman, T., & Chen, X. 2002 Risk and protective factors for physical functioning in older adults with and without chronic conditions: MacArthur studies of successful aging. *Journal of Gerontology*, 57, 355-369.
- 総務省統計局 2001 社会生活基本調査
- 杉浦淳吉・大沼進・野波寛・広瀬幸雄 1998 環境ボランティアの活動が地域住民のリサイクルに関する認知・行動に及ぼす効果 *社会心理学研究*, 13, 143-151.
- 竹内孝仁 2004 高齢者支援をめぐる課題—孤立化, 引きこもり高齢者への対応— *社会福祉研究*, 89, 31-38.
- 谷口勇人 2001 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析 *社会福祉学*, 41(2), 83-94.
- 田尾雅夫 2001 ボランティアを支える思想—超高齢社会とボランティアリズム— *アルヒーフ*
- Thoits, P. A., & Hewitt, L. N. 2001 Volunteer work and well-being. *Journal of Health and Social Behavior*, 42, 115-131.
- U. S. Census Bureau. 2002 *Statistical abstract of the United States: 2002*. Washington, DC: Government Printing Office.
- Van Willigen, M. 2000 Differential benefits of Volunteering across the life course. *Journal of Gerontology*, 55, 308-318.
- Wilson, J., & Musick, M. 1997 Who cares? Toward an integrated theory of volunteer work. *American Sociological Review*, 62, 694-713.
- Winniford, J. C. 1991 *An analysis of the motivations and traits of college students involved in service organizations*. Texas A & M University, College Station, TX.